ハワイに生きて——日系二世のオーラルヒストリー (1)

高木（北山）眞理子

1．はじめに

アメリカの歴史をひもとくと、そこには合衆国をつくり上げてきた偉大なる政治家・実業家の姿が浮かび上がる。植民地時代の指導者たち、建国の父祖たち、西部拡張をすすめたジャクソンなどのつくってきた歴史、つまり、権力者の目から見た政治経済史が、どうしてもアメリカ史の主流になりがちであった。その裏側で実際に歴史の一部を築いてきたはずの、名もない一般民衆の声は、長い間見過ごされてきた。エスニックリバイバルの盛り上がった60年代・70年代から、アメリカに流れ込んだ多くの移民（旧移民・新移民）や、奴隷として強制的に連れてこられ、数々の差別を経験した黒人、合衆国政府から西部へ追いやられ、迫害されたアメリカ原住の人々の経験を重視する民衆史的視点が取り入れられるようになった。この流れの中で、日系のアメリカ人も自らの歩みを世に公表するようになった。一方、日本人の間でも、100年以上も前にアメリカに渡り、アメリカに定住した移民とその子孫たちへの興味が高まってきている。

小稿では、ハワイ日系移民の子として生れアメリカ人として育ったひとりの日系二世の声をまとめ、そこから、二世の目で見たハワイ日系の歴史を紹介しようと試みる。一人の人間の経験から社会全体の歴史をみようとするのには、おのずから無理があるが、実際にその時代を生きた人の声の中には、現在手に入る「書かれた資料」にはない、貴重な過去が隠されているはずである。一般民衆の個人史からは、その時代の人々の声が聞こえるのである。

後藤健治氏（1989年７月著者撮影）

小稿の語り手の後藤健治さんは、ハワイ島プアコウ（Puako）生まれの日系二世である。86才の現在は第一線から引退し、ホノルル郊外のパールハーバーを臨む高台に萩野夫人とふたりで住んでいる。後藤さんは、第二次大戦前は公立高校の教師をしていたが、大戦中は軍の語学兵養成校の教師を勤めた。大戦後、ホノルルのクアキニ病院の経営に参加し長年にわたり病院の近代化に貢献した功績は、ハワイ社会で高く評価されている。1985年の官約移民百年祭では、

小稿の一部は、著者が、アメリカ学会を通じて財団法人アメリカ研究振興会の補助を受け、1989年７月ホノルルで行われた、9th annual meeting of American Studies Forumに参加させていただいたことにより、可能になったインタビューに基づいて書かれたものである。

実行委員会の総委員長を務めている。後藤さんは、ハワイの日本人移民社会が発展していく時期を力強く生きてきた。1941年、日米が戦闘状態に入ったとき、彼は37才であった。アメリカ人として戦争に貢献した彼は、戦後、やはりアメリカ人として、しかし日系のアメリカ人として、自らの信念を貫き、現在にいたっている。後藤さんのオーラルヒストリーを通して、私たちは、一人の日系二世の生き方と同時に、彼を育てあげた移民一世の志、そして当時のハワイの全体社会や日系コミュニティの状況を垣間見ることができよう。

後藤さんへのインタビューは1986年10月と、1989年７月に筆者によって行なわれた。一回目は主に後藤さんの幼いときの教育を中心に話をすすめ、二回目は、第二次大戦中の体験から戦後のクアキニ病院での活躍をうかがった。小稿は、このインタビューのテープをもとに、第二次世界大戦までの後藤さんの体験を中心にまとめたものである。オーラルヒストリーの手法としては、後藤さんの話した言葉をそのまま文字にすべきであるが、バイリンガルの後藤さんが方言の混じる日本語と英語とを巧みに使って話してくれたものをそのまま文章にするには困難があるため、できる限り後藤さんの口調を生かしながら筆者がまとめることにした。さらに、後藤さんの個人史をハワイの社会史と結びつけるため、筆者が途中で説明を加えている。

２．移民の子供として

「私の父（後藤卯之吉）は、福岡県粕谷郡の出身で、私約移民として1899年にハワイに来ました。その前に、父の兄（浅吉）が1893年に官約移民でハワイに来て、３年働いたのち、もう３年自由契約でハワイにおりました。ところが、日本の父、つまり私の祖父ですが、その人が死んだので、父の兄は日本に帰り、その代わりに私の父と弟（熊吉）の二人がハワイに来たわけです。父はカフク・プランテーション（Kahuku Plantation）で働きました。そこのルナ（Luna）が、人を酷使するのみならず、プランテーションの店でクレジット（credit)で買物をするとき、買わないものまで帳面につけて月末レイバラー（laborers）から余分のお金をとっていたのです。このつけ増しは皆の不平の種だったらしいです。父はこのままでは金は残らないので、逃げることにしました。夜中、もう一人の人と逃げだし、捕まらないように、カフクの次の鉄道の駅ハレイワ（Haleiwa）まで歩いていきました。そして、ホノルルに行って処の人[1]のうちへ行き、自分たちは条約逃げをしたんだといったところが、その人が笑って、‘もうここはアメリカだ。条約は憲法違反だから無効だ’といったそうです。プランテーションではそんなことは誰も知らなかったのです。私が思うに、もしいったら、‘Oh, we became free’といって皆ホノルルに出てってしまうかもしれないから故意に言わなかったのでしょうね。」

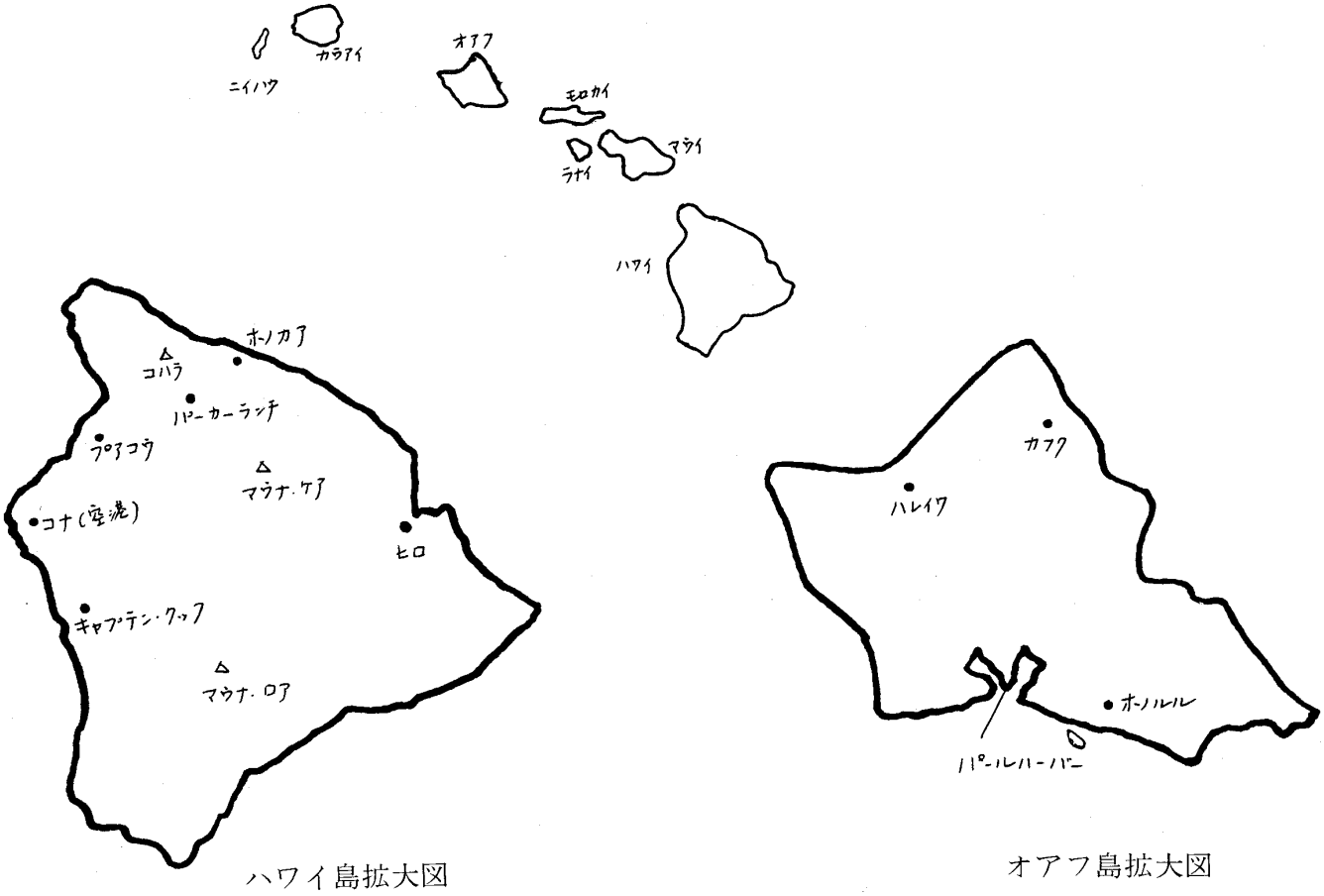
日本からハワイへの移民は、1885年から始まり、1894年迄は日本とハワイの政府間の契約による官約移民という形で、約３万人の人が渡布した。その後は、民間の移民会社の斡旋による私約移民が行なわれた。1900年にハワイがアメリカに併合されてアメリカの法律が適用されることになり、契約労働は禁止された。しかし、後藤さんの話からわかるように、移民労働者がすぐに契約から解放されたわけではなかったようである。

移民は上陸するとすぐにハワイの島々に点在する砂糖プランテーションに振り分けられた。そこには、ポルトガル人などの白人の「ルナ（Luna)」と呼ばれた現場監督がおり、労働者を監督した。

後藤さんのお父さん（卯之吉）は、逃亡の後マウイ島やハワイ島で働いた。1903年に再びホノルルに帰り、日本からハワイに家族とともに戻ってきた兄（浅吉）とおちあい、彼の妻の妹と結婚することになった。そして、後藤３兄弟とその家族は皆でハワイ島のコナ（Kona）に向かったのである。

「コナでは、初め、林三郎という医者とコン

ハワイ諸島地図



ハワイ島拡大図　　オアフ島拡大図

トラクト(contract)を結び、砂糖黍畑で黍切りをしました。それが終わると、1904年にプアコウ・プランテーション(Puako Plantation)を目指してコナからの80マイルの道を海岸づたいに歩いて行ったのです。プランテーションで3兄弟もふたりの妻も働きました。その後、浅吉さんは、蜂蜜飼を始めました。ビーハイブ(bee hives)を譲り受け、飴色の蜜のとれるキャベ(kiawe)[2]の木で蜂を育て、蜜を売りました。私の父は、プランテーションの用水の流れるとひを監視する仕事を引き受けました。とひはパーカー・ランチ(Parker Ranch)からプアコウ・プランテーションまで12マイルの長さのものでした。プランテーションをイリゲイト(irrigate)するのに、プアコウでは井戸水を使っていたのですが、その水が海岸が近いせいで塩分が強いので、パーカー・ランチからの水で薄めるのがアイデアだったのです。12マイルのとひに、何か動物が落ちると水の流れが悪くなります。そうならないように父は馬に乗って見て回っていました。私が4才ぐらいの時、父が夜の夜中に電話で呼び出されて出ていったのを覚えています。水が来ないので見てこいという電話だったろうと思います。」

当時の移民たちは、特に初めのうちはプランテーション会社に直接雇われ、農具その他を借りて、いわれた仕事をすることが多かったが、次第に独立して農具自弁で会社とのコントラクト、つまり契約を結んで黍を作り、会社に買い取ってもらう形をとることもあった。また、日本人移民相手の店を開いたり、プランテーショ

ン関係でも黍作りとは異なる仕事に従事することもあった。

初期の日本人移民社会で医者はエリートであった。後藤さんの話している林という医者も、日本の医学校ばかりでなくカリフォルニア大学も卒業してコナで開業していたという。日本人移民の指導者層は、領事館関係者を中心とし、各地の宗教家や教育関係者、新聞記者、医者などの知識人が作っていたのである。

「私が6才になったときに、学校に行かなくちゃいけなくなったので、ラージボーディングハウス（large boarding house）を始めました。あのころはバチェラー(bachelors)が多かったから、彼らに食事を食べさせるというビジネスが成り立ったのです。父も母も朝4時に起きて、朝飯をプリペア(prepare)して、弁当を持たせて仕事に出しました。弁当は二段に重なる缶で下にご飯、上の浅い缶に塩鮭とかちょっとした煮染めとかのおかずが入っていました。それをアヒナ(ahina)[3]の袋に入れ、ワンクォートボトル(1 quart bottle)にお茶を入れて、畑に出るもの20人のひとりひとりに持たせた。皆が畑に行ってから、父は風呂を焚くために薪を集めに出かけ、大きなスイミングプールみたいな風呂桶にバケツで水をためました。5時ごろに皆が帰ってきて風呂に入りました。皆がどんどん入るとお湯が減るので、父は水を足したり湯を熱くしたりしていました。母は午後の2時ごろから夕飯の支度をしていましたが、そればかりでなく、豆腐を作ったりもしていました。またこれはちょっと恥ずかしいのですが、日本でいうどぶ酒も作っていました。米を発酵させて。そして茶わん一杯5セントくらいチャージ(charge)してたと思います。

あの頃は、コナの海岸にハワイアンズ(Hawaiians)が住んでいました。彼らは毎日のように魚をとっては売りにきました。プアコウにはレイバラーズ(laborers)がいるので売れるからです。ハワイアンズはGのサウンドとTのサウンドができませんでした。それでゴトー(Goto)といえずにコーコー(Koko)と呼びました。“Koko, we got pihi. You like buy?”（魚をとったけど買いたいか）という。そういうとき代わりに何をやるかというとそのどぶ酒。5ガロンの大きなビンに酒を入れて魚と物々交換したわけです。こういうこと云うと、後藤の親は、法律違反やって子供を教育したなんて云う人がおるから、私は遠慮するわけだが、その頃の実態はそうだったんですよ。」

労働者にとっては、毎日の労働の後の一杯は楽しみであった。そこで、日系人の間でも、酒の密造はかなり行なわれたようである。[4] 独身者が移民の多くをしめた時代には、町には賭博場や遊興施設などがあり、労働者の金をまきあげていた。こうした町の一角の存在が、ハワイのホスト社会の排日気運を高めるひとつの原因だったことも確かである。しかし、次第に移民はハワイに家族を呼び寄せたり、日本から写真花嫁を連れてくるようになり、定住時代を迎える。子供が生れると、その子供たちの教育が、一世の懸案となっていくのである。

3．二言語二文化の生活――ふたつの学校で

日本人移民は、子供の教育に熱心だったといわれる。それが、二世の成功の一因ともなっているのは事実である。また同時に、日本人の親に育てられた二世が、言語的にも文化的にもホスト社会と日本人社会とに挟まれ、いろいろなディレンマを経験したこともよく指摘されることである。日本人としての考え方を伝えたいと、移民の親たちはハワイ生れの二世の子供を現地の学校のみならず、日本語学校[5]にも通わせた。子供たちは、まず、日本人ばかりのコミュニティで、日本的文化の中で独特の社会化を経験し、次に学校で他の人種の子供たちとの交流を通じて、英語とアメリカの文化にさらされたわけである。

後藤さんは、二世としては年長の部類である。彼は非常に一世に近い二世として、日本語と日本文化の影響を強く受けた世代といえる。

「私が小さい頃、まわりは日本人ばかりが住んでいました。でも6才になった頃、1910年頃ですね、フィリピノス（Filipinos）がやってきました。彼らは日本語もイングリッシュも.わからないし、彼らだけでキャンプ（camp）に住んでいました。だから風呂屋なんかもジャパニーズだけでフィリピノは入れないわけよね。」

「私が2年生の頃にプランテーションが倒産するというので、コナに行くことになりました。コナで商店を始めたのです。コナに行くまでは兄弟は3人でしたが、コナでもう3人生れました。私を頭に、5人男で最後が女の子でした。」

後藤さんの両親は雑貨屋を始めた。また、コーヒー作りに従事したり、映画館の経営をしたりと、いろいろな商売を試みたようである。

「店をやっている頃、母は、独身者のためにシャツを縫ってあげたりもしました。'後藤のママさん、私に仕事のシャツを縫ってください。パンツを作ってください。' とよくいってきたものです。私は店でレディメイドの服を売っていたのを覚えていませんよ。あの頃は、皆、服は手作りだったのです。11になった頃か、'健治、おまえ、ここにきてからこれにボタンをつけよ' といわれてボタンつけをやりました。ボタンの穴をかがるなんて事をやったこともあります。そのときは五人男ばかりで女の子がおりませんでしたから、わたしがやったわけです。」

「私達兄弟の間では日本語で話していました。私の小さいときは向こう三軒両隣日本人ばかりでしたからそれが当たり前でした。それでも私はエレメンタリー(Elementary school)の一年にはいった時、英語を知っていました。プアコウにおったときに、ハワイアンズもいましたし、ハワイアンボーイズ(Hawaiian boys)とも遊んだりしとったからね。ところが、私のワイフとなると、1年になったときイングリッシュがわからなくて、自分も困ったし、先生も困ったそうです。

私が8年生のとき、1年生の先生が来て、"Kenji, will you come over to tell the students in Japanese? I want to get them to bring toothbrush and Colgate toothpaste. But how much I tell them they don't bring." 僕はあの時代から通訳をやっとったわけです。そしたら、しばらくしてその先生が "Kenji, they brought toothbrush." といいにきました。あのころは、まだ、英語のわからない子供がいたんですよね。

一世の親はコーヒー山に仕事に行くとき、子供を連れて行ってたし、木と木の間にハンモックをつるして赤子をそれに入れたり、箱に入れて上に茅をつるしたりしていたんです。つまり、赤子の時から聞いていたのは日本語ですよ。子供は日本語を聞いて育ったのです。だから、私のワイフなんかは、学校に行くのが嫌で嫌で、逃げて帰ったこともあるそうです。長男長女に、日本語しかわからないという傾向が強かったでしょう。下の者になると、上の者が学校に行ってイングリッシュを習ってくるから英語を話すことも楽になったと思います。私の一番下の妹などは、もう、英語の方が楽だったようです。それでも、両親と子供たちの間にはコミュニケーションのギャップはありませんでした。もちろん、日本の親子ほど意志の疎通はうまくできてなかったかもしれません。子供がいいたいことがあってもいえなかったりしたのです。日本語のボキャブラリーは、日本で育った同じ歳の子供に比べればこちらの子供は劣っていましたよ。」

二世の日本語と英語の能力は一概に決められない。二世の出生年はだいたい1900年から1940年の長い間に跨がっている。1920年頃までに生れた子供たちは、一世の親の世代とのつながりが強く、たとえハワイで生まれ育っても、日本語の能力が高い。その彼らにしても、会話能力のわりに、読み書きが不得意なのは否めない。一方、1920年代以降生れの二世は、まわりに英語のできる年長の二世がいる中で育ったためか、英語の方が日本語よりずっと得意である。逆に、日本で教育を受けてハワイに戻ってきた帰米二世は、英語の力が非常に弱い。一般に第二次大

戦以前の日本人コミュニティでは、一世がリーダー格であり、日本語の会話力はそこでの生活に必要なものだったといえよう。大戦中に日本語の使用が制限されたこともあり、そのなかで、一世から二世への世代交代が始まり、日本語から英語への転換が起り始めた。しかし、それは、戦後の日本人コミュニティがすぐに英語だけの社会になったことを意味しない。戦後になっても日本語はコミュニティに必要な言語であったし、徐々に日本語から英語への転換が進んでいったと見るのが正しいと思われる。

二世の日本語力を養ったのは、家庭であり日本語学校であった。日本語学校は、日本人の集住していた各地域にあり、二世の90パーセント以上が通った、今で云えば塾のようなところである。しかし、塾と違うのは、日本人の子供にとってパブリックスクールと日本語学校の両方に通うことは、義務教育のようなものであったということである。親は、食べるものを切りつめても日本語学校に子供を通わせたのである。自分が読み書きがよくできないので、子供には習ってほしいと子供を日本語学校に通わせた親もいたはずである。また、日本語学校はたいてい午後授業をしたので、両親が一日中働いているプランテーション労働者の場合、子供を見てもらえる格好のデイケア・センターの役割も果たしてくれた点は興味深い。

「日本語学校は、もちろん子供と親の意志疎通のためもありました。しかし初めの頃は、日本人が腰掛け主義だったんですね。それで、日本に連れて帰った子供が、日本語ができないと恥ずかしいし子供も不便だろうということで、学校が始まったのだろうと私は思います。それから、後になると職業です。当時日本人の商店は沢山ありました。小さいものばかりで、一人か二人従業員を雇う程度でしたが、日本人の会社で仕事をするには日本語ができなくてはなりませんでした。また、ホノルルの横浜正金銀行とか住友銀行とか太平洋銀行とかの大きいところでは、日本語を知っておって初めて雇ってもらえるのです。それから、今のアムファック(Am Fac－当時のAmerican Factors)やT.H.デイビス(T. H. Davies)とかは食料品や金物、衣料、運送、保険、宝石などの卸売業をやっておったわけですね。食料や衣料や金物類は、特に日本人の小さい小売りの店が売っていたわけです。それで、日本人とビジネスをするため、日本語の知識はそういうハオレ(haole)[6]の会社でも必要だったのです。また、プランテーション会社でも、オフィスでは、日本人の移民を相手にしなくてはなりませんから、日本語がとても必要な仕事でしたね。だから、ハワイで仕事をするのにも英語だけでなく日本語は大事だった。日本語学校の日本語は役に立ったのです。」

「私は、小学校はコナワイナ・エレメンタリー(Konawaena Elementary)に通いながら、コナ本願寺日本語学校に行っていました。コナの日本語学校の先生は、本願寺の開教使の先生とその奥さんでした。当時、日本語学校の先生は日本の師範学校出の人もいましたが、プランテーションの労働者の中で少し学歴のある人がなることもありました。当時の労働者は、小学校をちゃんと終えているものはそう沢山はいなかったのかもしれません。あの人は高等小学校出だってよ、とまわりの人にいわれるくらいでしたから。私の父は日本で小学校4年まで行ったと云ってました。母は学校は余り行かなかったらしいです。先生のなかには字をまちがえて書くような人もいました。生徒は字引を引くから正しい字がわかっているわけで、あの先生はブラッガー(bragger)[7]だ、なんて云ったものです。

1920年代、30年代になって学校が増えると先生が足りなくなり、ハワイで先生を養成する必要がでてきました。それでハワイ中学校に師範科ができ、そこの卒業生が先生になるようになりました。」

日本語学校には、本願寺系の学校と、宗教に関係ない独立学校とがあった。本願寺系の学校でも平日は仏教にはふれずに日本語だけを教えたが、先生はお坊さんであることが多かった。ホノルルで日本語学校の名門校といえば、独立学

校の中央学院と本願寺系のハワイ中学校・女学校があった。中央学院は独自に教科書も編纂し、非常に質の高い日本語教育をしていたので有名である。一方、ハワイ中学校には学生寮があり、他島出身者はその寮に住み、朝は仏教のお勤めをし、そこからパブリックスクールに通い、放課後日本語を学び、寮で両方の学校の予習復習をする毎日を過ごした。教育熱心な一世にとってはこのような学校の存在はありがたいものであった。

「本願寺の学校では、月曜から金曜まで放課後毎日１時間授業があり、土曜は半日授業で、日曜には日本語学校とは別にサンデイスクールがありました。そこでは、開教使の先生や奥さんがとても上手に四十七士の話などをしてくれました。

毎日の授業は、読本、修身、綴り方、地理、歴史、唱歌などでした。土曜には女は裁縫、男は外で運動をしました。学校では日本の文部省の教科書を使っていました。修身では孝行や忠君愛国を習いました。この時先生が、皆さんはアメリカ人ですから、自分の国に忠義をつくしなさいと注意をされたのを覚えています。

先生は日本式の教育をしました。とても厳しかったです。顔をたたかれたりしました。特にハワイ中学では、問題児は教員会議にかけられ、あとで厳しい罰がありました。

天長節には日本語学校で礼拝式がありました。校長先生が教育勅語を読まれて、私達は整列して聞いていました。この日はパブリックスクールに日本人は行きませんでしたよ。日本人は家の外に日の丸の旗を立てたものです。だからその頃白人が、もし日本とアメリカと戦争をしたなら、二世も日本のために尽くすにちがいないと思ったのも無理からぬ事ですよね。正月も学校に行きました。最敬礼、という号令のもと、日本の方を向いて礼をしたのですよ。」

後藤さんの子供時代は、日本の明治時代の影響を強く受けていた。一世は日本人であったし、アメリカにいても日本人であることを忘れないばかりかそれを誇りに思っていた。後藤さんの生れた1904年は日露戦争の年であるが、日本人コミュニティはこの戦争での日本の勝利を心から喜んだという。町では日本の映画や講談などが楽しまれ、子供たちはチャンバラ遊びをしていたのである。後藤さんの話を聞いてもわかるように、学校でも日本的な教育をしていた。このような日本語学校教育がアメリカ文化を導入し、日本とアメリカの橋渡しをする子供たちの教育へと変化していくのは、日本人が定住を決意しはじめた1920年代・30年代であった。日本人のコミュニティは、プランテーションの賃金・待遇における人種差別をめぐって労働者がおこしたストライキ[8]や、日本語学校をなくそうとするハワイ社会の圧力との戦いを[9]通じて、日本人がハワイの社会で余り浮き上がってはいけないということを学んだのである。アメリカに生きるのならアメリカ文化に同化しなくてはならない。しかし、日本人独特の美徳を捨ててアメリカ的考えに完全同化することがコミュニティの方針ではなかった。日本人の良さを生かせる善良なアメリカ市民を育てることがコミュニティの一世の望みだったといえる。

４．差別を越えて――ハワイ社会における同化

後藤さんはコナで８年生を終えた後、ハイスクールに進学するため単身でホノルルに来た。マッキンリーハイスクール（McKinley High School）[10]に入学すると同時にハワイ中学校（日本語学校）に編入し、ハワイ中学の寄宿舎に中学校卒業まで住んでいた。寄宿舎から歩いてマッキンリーハイスクールに通い、終わるとハワイ中学校に行き、また歩いて寄宿舎に帰るという毎日であった。1922年に中学校を卒業したが、ハイスクールの方は最終学年が１年残っていた。寄宿舎を出た後藤さんは、ちょうどホノルルのハワイ大学にいた従兄のバロン後藤（Baron Yasuo Goto）[11]と一緒に住むことになったのである。

「私はコナのパブリックスクールでは優等生でしたが、マッキンリーではどうやらスタンダードが違うらしく、宿題についていくのも大変でした。英語を読むのが遅かったし、ボキャブラリーが足りなかったのです。日本語はかなり良かったのですがね。田舎の学校とは違うなあと思いました。

中学を卒業した夏、コナの家でコーヒー山をヘルプしに帰っていました。ある日店の番をしていると、ホノカア（Honokaa）の日本語学校の先生がホノルルの日本人商工会議所（Japanese Chamber of Commerce）の仕事の口を持ってきてくれました。シニア・イヤー（senior year）で僕の授業は全部12時に終わっとったと思います。毎日１時から４時まで働いて月20ダラーもらいました。それと、僕の前に商工会議所で働いていた人が持っていたもうひとつの仕事も引き継ぎました。それはヌウアヌ・キンダーガーテン(Nuuanu Kindergarten)の維持費を集めて歩く仕事でそれも20ダラーでした。毎月20日ごろになるとヌウアヌの総領事館やヴィンヤードストリートの日本人の店屋でひとり１ダラーを集めてまわりました。この人たちは皆商工会議所の会員だったから、この時一緒に会費も集めてしまいました。それで月に40ダラー稼いでいたのです。

ハイスクールを卒業するとき、私は大学に行く気持ちはありませんでした。しかしそのころ、ダウンタウンでフルで働いても月に50ダラーでした。バロンが、“You are earning 40 dollars a month. Why don't you go to university?” というので、それもそうだと思い、大学に行く決心をしました。ハイスクールで商業の授業（会計、簿記、速記、タイプ）をとっていたので、大学でもビジネスと経済学を専攻しました。それというのも、そもそも、ハワイ島のキャプテン・クック・コーヒー会社（Captain Cook Coffee Company）で会計士をしている日本人をみて、ハオレの農場のなかではその仕事がとてもいいものに思えたからなんです。コーヒー農場ではたくさんの人が彼を尊敬していましたから、あんな仕事ができたらなあと思ったのです。それに、理科系のコースをとると午後は実験があり、仕事ができなくなります。でも、ビジネスのコースなら午前中に終わるので好都合だったんです。

大学に行きながら仕事を続け３年過ぎた頃、私は500ダラーを貯金していました。シニアになるとき、“Well, why work?” と考え仕事をやめ、フルタイムで勉強しました。成績が上がりましたよ。」

「大学を卒業するのでいよいよ仕事探しを始めましたが、なかなかありませんでした。それで、沖仲仕の仕事なんかもやりました。港で砂糖の袋をおろしたり積んだりするすごくきつい仕事でしたが、週に60ダラー稼げたのです。セールスや事務員だと月50ダラーしかもらえないときですよ。このころ、T.H.デイビス・アンド・カンパニー(T. H. Davies and Company)の食料品課で働いていた人と一緒に暮らしていたのですが、彼がデイビスに空きがあると教えてくれ、やらないかといってくれました。それで、“Why not, let me try it” ということになり、月85ダラーの契約で仕事を引き受けました。

このとき私の弟がコナでハイスクールを卒業してハワイ大学に入りたいといってきました。この頃にはコナにハイスクールがあったのです。それで、弟に “Come over. I'll send you school.” といってやりました。この頃ハワイ大学は州の出身者には授業料なしで入学させてくれたのです。パブリックスクールと同じでした。テキストや実験費などが少しかかるだけでした。

デイビスでは内勤のセールスをしました。私は日本語ができますから、日本人のお客が後藤を名指しで電話をかけてきました。食料品のオーダーから値段の問い合わせまでいろいろでした。デイビスに務めて一年くらいしてから、ハオレの高校卒業生がセールスに入ってきました。私たちは机を並べて仕事をすることになりました。彼は英語しかできませんから、日本語の電話があると私にまわしてきました。ある日彼にいくらもらっているのか聞いてみると、125ダラーもらっているという。私は85ダラーです。それで私はマネージャーのところへ行っていいまし

たよ。あの人は、125ダラーで私は85ダラーの賃金です。彼は高校卒ですが私は大学卒です。彼は英語だけしか話せませんが私は日本語と英語の両方が話せます、と。すると、マネージャーは、"Oh, there must be some mistake." というのです。そして次の朝マネージャーが電話で云いました。今までのはまちがいで、今月から125ダラー払いますよ、と。でもこの時私は思ったんです。きっと時間がたてば、このハオレは私より早く高い地位に上るに違いない。ずっと彼を追っかけていくらもらってるか聞くわけにはいかないから、これからどうなっていくか確かめることは難しいでしょうし。とにかく私はいつかどこかでだまされるんだって思ったのです。それで、私は学校の先生になろうと決めたのです。テリトリー(Territory)の教育局(Board of Education)は、白人だろうとオリエンタルだろうと、決められたサラリーのスケジュールにそって給料を払ってくれますから。私企業だと、顔を見てからサラリーを決めるので、自分を高く売った人がいい給料をもらえるのです。それに企業のほうがもうこれ以上払わないということもあるわけです。でも学校の先生は決まった給料で、私企業みたいなことはない。それで私はデイビスをやめました。」

「先生になるために大学に戻り、夏学期1回と2セメスター(semesters)で、教職のための単位を取り終えました。すぐに私はコナワイナ・ハイスクール(Konawaena High School)に職を得、そこでずっと働きました。1935年に結婚し、41年には戦争が始まったのです。1942年9月にホオケナ・エレメンタリー(Hookena Elementary)の校長になりましたが、43年に語学兵を志願し本土に行くことになったのです。」

戦前は、日系人が白人の大企業で差別されたことはよく聞かれる。ハワイの経済を文字通り牛耳っていたハワイのビッグ・ファイブ(Big Five)[12]といわれた企業体では、日系人や非白人が不当に安く雇われていた。後藤さんが短期間働いたデイビスもビッグファイブのひとつである。バイリンガルで働き者であるにもかかわらず、二世には、自分の本領を発揮するところが限られていた。本土の大学に行って医者や弁護士になることは、日系社会での「アメリカンドリーム」だった。日本人経営の小さな商店に務めてそれを大きくするため働いたものもいた。親の店を引き継いだ者もいた。教育を得た二世の中には、不公平に扱われるのを嫌って後藤さんのように公務員を選ぶものも多かった。この傾向は比較的長く続いたので、今でもハワイの公立学校では日系人の先生が多く、日系人のオーバーリプレゼンテーション(over-representation)[13]と云われている。

二世は一世の期待を背負っていたのだが、ハワイ社会が二世をアメリカ人と認めるには時間を要した。二世自身が、アメリカ市民なのに日系であるがために差別されることに怒りを感じていたことは確かだ。しかし彼らははあきらめなかった。心からハワイを自分のふるさとと考えていたので、アメリカと日本が戦争状態に入ると、アメリカのために働くことを望んだ二世が、ハワイでは大半だったのである。

5. 日本語を生かす ―― アメリカ人として

「1943年に442部隊の募集があったので、私は一日系アメリカ人として志願しました。しかし、私はそのときもう38才で、選考にもれてしまいました。そのすぐ後、語学兵の募集があり、これに応募して今度は選ばれました。1943年6月に我々はミネソタ(Minnesota)のキャンプ・サベージ(Camp Savage)のMISLS(Military Intelligence Service Language School)に行くことになりました。5クラスへのクラス分けテストで私は最難度のセクション1に入りました。そこでは、マサジ・マルモト(Masaji Marumoto)とかベンジャミン・タシロ(Benjamin Tashiro)[14]など、後にハワイで活躍した者たちと一緒でした。セクション1の20人は皆、ハワイの日本語学校の卒業生か帰米の二世で、日本語も英語もともに優れた者たちばかりでした。

帰米でいくら日本語が優れていても、英語がよくできないものは違うセクションでした。ここで6ヵ月の語学教育を受けることになっていたのですが、9月に命令が下り、私を含む5人[15]がハワイに戻って語学兵を集めてくるように云われました。

私は出身のハワイ島担当で、11月にハワイに戻ったところちょうど妻の萩野が次男を生んだことを知り、一晩家に帰って赤ん坊と萩野に会うことができました。ハワイ島を二回まわり、コナからは私の高校での教え子を含む16人が志願してくれました。この時の募集と試験で全ハワイから333人とり、キャンプ・サベージに連れていきました。2月の雪の降る寒い日だったと思います。」

「マルモトとタシロと私の3人は、キャンプ・サベージに戻ると即座に教師になりました。3人ともキャンプを出たとき伍長（Corporal）でしたので、伍長のままで教えてたのですが、セクション1を終えて教え始めた残りの17人は二階級上の二等軍曹（Staff Sergeant）に昇進しているじゃないですか。それで、民間人の教育部長（Civilian Director of Education）、ジョン相磯さん（Mr. John Aiso）にいつ昇進できるか聞きに行きました。彼が‘ハワイに行けたんだからラッキーだったじゃないか’というので、私は、我々を有能と認めたからハワイに送ったのでしょう、我々が好きで行ったのではないのですから、それで昇進見送りはないですという意味のことをいいました。相磯さんが、二等軍曹のランクの数はかぎられていてもう残ってないんだというので、いってやりました。‘私たちのためにそのランクをとっておいてくれるべきでしたね。私はこの学校にいたくないですから海外へやってください’とね。でもこの話はこれで終わりになり、私たちは低いランクのままでした。

面白かったのは、それからタシロとイデウエと私に戦闘の基礎訓練に行けという命令が下ってからです。これは海外に派遣されることを意味しているのです。訓練を終えて、フォート・スネリング(Fort Snelling)へ行く電車に乗っていました。すると電車が止まり、上官が云うのです。“Goto and Tashiro,get off the train.” 結局我々はキャンプに戻り、教官にされました。このとき、二等軍曹に昇進したんです。1944年の8月だったでしょう。

それから半年してからか、上官が私に云うのです。今二等軍曹の者は今度技術軍曹(Technical Sergeant)に昇進するが、君はなれないんだ。私は君を推薦したんだが、相磯さんが、“Sergeant Kenji Goto is a very selfish man.Therefore I don't recommend him to be a technical sergeant.” というものだから。でも、昇進者のリストが公表されるとなんと私の名も含まれていました。やっと私は他のセクション1の連中においついたんです。」

「教え子のなかで印象に残っているのは、私がハワイ島で語学兵募集をしてまわったとき志願してきたコージ・アダチ（Koji Adachi）です。彼は、コナの本願寺のイチジ・アダチ(Ichiji Adachi）の息子で、戦争勃発直後、イチジはFBIに連行され、強制収容所に入れられてしまいました。[16]その頃ハワイでは、家族の誰かがアメリカ軍に従軍すれば強制収容所に入れられているものが解放されるという噂が流れていました。それで、コージは父が帰ってくるならと志願してきたのです。もちろん、噂は噂にすぎなかったのですが。彼は語学校での成績が良くなくて、442部隊へまわされてしまいました。私は、自分が選んだこともあり、その子の母親を知っていたこともあってすごく心配しました。彼が無事に442から帰ってきて本当に良かったですよ。」

軍の日本語学校では、前線に出て、捕獲文書（日記、手紙、地図等）を翻訳したり、日本兵捕虜の尋問をしたりするために必要な科目を集中して教えた。内容は、読み方、書き方（漢字)、会話、翻訳、通訳、捕虜尋問、兵語（『作戦要務令』、『応用戦術』)、日本の地理、歴史、文化、草書の読み方と広範囲にわたっていた。訓練期

間は6ヵ月だったが、日本語、英語どちらかが不十分な場合は、9ヵ月から1年にのばされた。教官が、語学兵として不適格という決定をくだすと、442部隊の補充兵や捕虜収容所護衛訓練にまわされた。学校では毎日授業があった。月曜から金曜までは午前4時間、午後3時間、夜2時間の合計9時間で、土曜は午前4時間というハードスケジュールであった。授業に加えて宿題もせねばならず、消灯時間をすぎると明かりを求めてトイレの中で勉強をする語学兵の姿も、まれではなかったという。(17)

訓練を無事通過し、前線に配属された語学兵は、10人で1チームを作り行動した。日本語会話に堪能な者、英語に堪能な者、日本語解読がよくできる者などをうまく組合せてチームづくりをしていた。日本語が劣るものは、いつも字引を持っていたため、まわりに「字引もち」と云われていたという。語学兵は、捕虜の訊問ばかりでなく、密林や洞穴に逃げ込んだ日本兵に投降するよう勧告することもあった。また、アメリカ軍の白人兵から日本人と間違えられ、真っ青になった白人兵に、自分は日系のアメリカ人だと説明する一幕もあったという。

後藤さんは、いちど帰米ばかりのクラスを担当し、そのクラスの教え子と非常に良い師弟関係を作り上げた。教え子は後藤さんを尊敬し、前線に行くなら彼に引率の上官になってほしいと望むものもいたという。このことと今までの功績が買われ、後藤さんは、ジョン相磯教育部長から、新しく開設する会話学校の担当をするよう依頼された。同時に彼は曹長（Master Sergeant)に昇進したのである。

前線では、語学兵が訊問や翻訳で情報をえても、それが中隊や小隊に伝わるまでに戦況が変化してしまうことがあり、各小、中隊に捕虜を訊問できる語学兵を配属することが望ましくなっていた。そこで、会話学校を作り、訊問のできる兵を養成することになったのである。

「20人の教官とともに私はカリキュラムを作りました。ひとつ面白いことをやりました。One hour every day of singing Japanese songs です。ここで、日本の軍歌などを歌ったのです。アメリカ本土の10の収容所から日本の歌のレコードを集めてきて使ったのですよ。麦と兵隊とか、ぬかるみの、とか。歌詞を皆で聞いてそこに見られる日本人のメンタリティを研究したのです。もちろん、まず第一には兵士がリラックスするため、そして言葉を学ぶために考えた時間でした。このやり方は、ミネソタの語学教育の権威の大学教授から批判されました。でも私はやめませんでしたよ。」

新しい会話学校は二ヵ月半の訓練を与えることになっていたが、途中で日本が降伏したので、語学学校自体が方針を変えた。進駐軍従軍のため、民間行政の知識を教授することになったのである。1945年9月、会話学校は第1回卒業生を出し、後藤さんは、この時に学校長を辞任し除隊、ハワイに戻ったのである。

後藤さん等の優れた教官のもと、非常に厳しい語学訓練を終えた語学兵が、多方面で大きな成果をあげたことは有名である。ニューデリーの東南アジア翻訳訊問センターの指揮官ブルンダ大佐は、「一人の語学兵は歩兵一個中隊に匹敵する価値がある」と評したと伝えられている。さらに、大戦後、マッカーサー元帥の情報参謀次長ウィロビー少将が、「日系情報部語学兵が太平洋戦に参加して、敵の情報収集に尽力したので、戦争が予想より2年も早くおわった」と述べたことは有名である。(18) 太平洋戦で、語学兵が日本語の技能を駆使してアメリカ軍に多大な貢献をしたことは、ヨーロッパ戦線で大活躍した442部隊と第100大隊の功績と同様、日系人の誇りなのである。また、日本語学校で訓練を受けた語学兵が、日本の降伏後、進駐軍に従軍して日本政府との連絡役を務め、日本の民主化に寄与したことも忘れてはならない。

6．生きる信条 —— 日本からの文化的遺産

最後に、後藤さんは、日本文化を自分の生き方にどう位置づけているのだろう。

日系人の教育重視は、日本的考えを受け継い

でいるが、同時にアメリカの勤労重視の価値観とも一致している。自分の身についた文化的特性と移民先の文化が一致したのは、日系移民にとっては好運であった。一方、親孝行や、家族の密接な結びつき（連帯）は、日本的な価値観であり、アメリカの個人主義とは相反するものであった。二世は心の中で、アメリカの価値観と一世から受け継いだ日本的な価値観との葛藤を経験しながらも、日本的美徳を生かしてきたのである。これは、三世の時代になると変化する。一般的に、三世はアメリカ的な生き方を当然と考え、日本的価値は心の奥深くに隠され、たまに顔を出す程度になってきている。

教育についての後藤さんの話に耳を傾けてみる。

「８年生を卒業するときコナにハイスクールがないので、ホノルルのハイスクールにやってくれと母に頼みました。すると母は、‘そういうことはできるものか、うちには子供が沢山にいるのに。そういう金はないよ’というのです。私は悔しくて１週間、２週間、よく泣きました。すると母がいいました。‘健治、お前はそれだけ学校に行きたいか。お前はコーヒー畑で働かせようと思っとったが、まあ、どうにか、工面はつくだろう。学校にやるよ。’私はすごく嬉しかったです。」

この会話の裏に、自分がどれだけ働いても子供に教育を与えてやろうと決心した母と、母の言葉に心から感謝した後藤さんの喜びが感じられよう。親の理解を得て、大学を終えて教員としてコナに帰ってきた後藤さんは、しばらく両親とともに住んでいた。

「コナで先生をするようになると、コナの家から仕事に行くようになりました。夕食後、母とよく話をしました。母はこういったものです。‘家の子供はどういうわけか学校に行きたい行きたいという。コーヒー山でもやればいいのに。それでもそう悪いことはないのになあ。まあ、自分の生んだ子供だから、学校に行きたけりゃ、やってやりゃないかん。’母は、よく働きました。暗くなってもコーヒー山から帰ってこないので心配して見に行くと、母はまだ働いていました。‘自分の生んだ子の学費をお前に出してもらっているんじゃ、親の資格がないよ’というんです。私はますます兄弟たちの学校に行く助けをしてやらなければ、と思いましたよ。」

「私は、1935年に萩野と結婚しました。萩野は、家のコーヒー園の隣にコーヒー園をもっていた処の人の娘で、公立の師範学校（Territorial Normal School）を出て、先生の資格を持っていました。うちには長いこと娘がいなかったので、母が萩野を娘のように可愛がっていて、私に、萩野のような子と結婚したらどうかといっていました。そんなことで、萩野といっしょになりました。結婚してから、萩野は私の支えになってくれたばかりでなく、私の弟たちの教育費の工面までやってくれました。私たちは５人兄弟とひとりの妹の全部で６人構成でした。上の弟、つまり次男はハワイ大学を卒業しました。３男は、歯医者になりました。４男は、ハワイ大を出て、農業の先生になりました。５男は医者になり、今も患者をみています。一番下の妹は、クィーンズ看護学校を出て、看護婦になりました。しかし、３番めは歯医者を始めて２年後に亡くなり、妹も29才の若さで亡くなってしまいました。兄弟が多いと、年上の者が年下の者の教育の面倒を見ることは、ハワイの二世の間では、わりと普通のことだったと思います。よく、後藤さん、お金あるでしょうねえと云う人がいますが、私にはお金はありません。もう、弟たちの教育に皆使ってしまいましたから。」

「当時、どの親も、学校に行ったら勉強せいよといったものです。つまり、教育こそが、社会のはしごを上るのを助ける手立てと信じていたんです。親が子にしてやりたいと思っていることを、上に生れた者が手助けするのはあたりまえだった。そして、両親の助けをしなくてはいけないという気持ちは、真宗の教えと、日本語学校の教育を通じて身についたものだと私は

思っています。」

後藤さんの心には、学問をしたいという弟・妹の教育費を出してやることが両親の助けになる、という強い信念があったのである。親孝行の美徳は、小さい頃から日本語学校や本願寺のサンデイスクールで聞かされ続けたもので、彼にとっては、当然のことであったのに違いない。移民の家族は子沢山であった。10人兄弟というのも普通であった。子守ができる年になれば、上の子供は、小さい弟妹の面倒をみなくてはならなかった。日系二世の間では、沢山いる兄弟のうちでも、下の弟の方が、学歴も高く、収入の高い職業についている場合が多い。後藤さんはこれを「長男犠牲」と呼んでいるのである。(19)

こうした日本的な面と同時に、後藤さんには自分はアメリカ人であり、アメリカ人として平等に扱われるべきだと強く考えるアメリカ的面もある。若い頃、日系人を差別するデイビス・アンド・カンパニーをやめて教員になったのも、自分の能力が正しく評価されないことへの怒りからであっただろう。アメリカの学校で学んだ、全ての人々は平等だという概念が、彼の考え方に影響を与えていたと思われる。そして、後藤さんの目指したのは、やはり、日本の良い面を生かしながら、アメリカの、ハワイの社会に貢献することだったのである。

いざ日米開戦となったとき、後藤さんはアメリカのために尽くすことを選んだ。ハワイの日系人は、本土の日系人と違い、全員が強制的に収容所に移住させられることはなかった。それは、日系人がハワイ社会の40パーセントをしめており、日系人がいなくては経済が動かないからであった。しかし、日系人はその忠誠心を疑われた。一世は銃やカメラや短波受信機の所有を禁止され、二世軍人は家に戻された。だが、日系人の隣人の中には日系人を信じ彼らに手を差しのべるものもいた。このローカルな人々の結びつきは、ハワイの日系人の財産であったともいえよう。

「戦争になったとき、困ったことだ、と私は思いました。私の両親は日本国籍の日本人です。私には、純粋に日本人の血だけが流れているのです。私は文化的にも日本の人間なのです。でも、私はアメリカに生れたアメリカ人なのです。私は、家で、そして、日本語学校で習った日本語の知識を生かして、アメリカ合衆国のために働きました。でも、日本語学校を始めた一世たちは、子供たちが日本語を使ってアメリカ軍の助けになり、対日戦争に参加して、勝とうとは、夢にも思わなかったでしょうね。」

日米開戦、それもパールハーバー爆撃による開戦は、ハワイの日系人に大打撃を与えた。パールハーバーを爆撃する日本軍の飛行機を見ながら車を走らせていたある二世は、助手席に座っている父親が、‘バカなことを、なんてバカなことをしてくれた’と涙を流すのをみて、胸がつまったと声を震わせながら話してくれた。(20) 日本がアメリカを攻撃するなど、起こってはいけないことだったのである。だが、日系二世は、自分は日本人ではなくアメリカ人だと証明せねばならない立場におかれてしまった。彼らは、日系部隊の編成を懇願し、それに志願して、多くの戦死者を出しながら、アメリカへの忠誠心をアメリカの多くの人々に知らしめたのである。

7．おわりに

日系人は、アメリカではモデル・マイノリティー(Model Minority)といわれ、成功した少数派、というイメージが強い。ある意味では、確かに日系人の社会的地位は向上した。しかしそれは、一世の移民と二世の子供たちが、ホスト社会からの差別・排斥と戦って手にした勲章なのである。また、ハワイの日系人は、本土の日系人に比べて、苦労が少なかったし幸運だったと思われる傾向がある。これも、本土の日系人が強制収容所に入れられ、その後、改めてゼロから始めなければならなかったことを考えれば、正しい指摘かもしれない。しかし、日系人がハワイの政治・経済で指導的役割を果たせるようになったのは、やはり第二次大戦後のことなのである。

それまでは、ハワイ経済を支配していた独占企業の中で、差別偏見の犠牲になっていたのである。戦前は、ハワイという白人少数寡頭支配の特殊な社会では、数的に多数派であっても、実際はマイノリティーであったのである。戦後、本土の企業がハワイに経済進出してから、少しずつ日系人が正当に扱われるようになっていった。また、戦後すぐに起こった大規模な労働者のストライキも、ハワイの独占企業体の力を弱めるのに役立ったといわれている。

後藤さんの話から、日系二世の育った背景と戦争での特殊な立場や心境を見ることができた。彼の経験は彼個有のものではあるが、似たような経験をしたり、彼のような気持ちを共有する日系二世も多いであろうと思われる。彼の生の声は、ひとつの資料として価値を持つばかりでなく、私たち日本人に、国とは、文化とは何かということを語りかけてくれている意味のある言葉だと思う。後藤さんの経験は、日系人の歴史の中で、またアメリカ人の歴史の中で、見過ごされてはいけないのである。

[謝　辞]

著者は、1985年から1987年までハワイ大学に滞在し、社会学部の修士論文を書くため、20人近くの日本語学校に通われた経験のあるハワイ在住の二世の方々にインタビューをさせていただいた。ご協力いただいた全ての方々にここであらためて感謝の意を表したい。特に、小稿の語り手である後藤さんには、一回目のインタビュー（3時間余り）で様々な貴重な情報をいただいた。後藤さんのお話をまず書きたいと思ったのも、後藤さんの記憶力の良さに驚愕したからである。さらに多くのお話をうかがうため、著者は1989年夏にも後藤さん宅を訪れ、インタビューをさせていただいた。心からお礼申し上げたい。

[注]

(1) 移民たちは、出身地をともにする人々との結びつきを大切にした。今でも、県人会という組織があり、同県出身者が年に何回か集まって交流を深めている程である。処の人というのは、同じ村や部落から来た人をさし、同県人よりももっと親密な関係にあったという。

(2) キャベ（kiawe）は algaroba を指すハワイアン語である。キャベの木は、とても良い炭が出来るので有名であるが、また、キャベの花からは透明な蜜が沢山とれ、養蜂業には適していた。プアコウの近くにキャベの森があったのである。

(3) アヒナとは、ハワイアン語でデニム（denim）を指す。

(4) これはハワイに限らず、たとえば米本土ワイオミングに移民した日本人の間で「月光」と呼ばれた密造酒が広がっていたという。詳しくは、鶴谷寿著『アメリカ西部開拓と日本人』（日本放送協会、1977年）を参照されたい。

(5) 日本語学校の歴史や使用されていた教科書の内容については、高木真理子著「戦前ハワイの日本語学校－アメリカナイゼーションと修身教育」（アメリカ史研究 No.12 1989年）を参照されたい。

(6) Haoleとは、元来ハワイアンの言葉でよそ者を意味していたが、白人を指すハワイのピジン用語になっている。今では、同じハオレでも、メインランド・ハオレ（mainland haole）といえば、本土から来たハオレをいい、ローカル・ハオレ（local haole）といえば、ハワイ生れのハオレをいう。ちなみに、ハワイ生れをさすハワイアンの言葉にはカマアイナ（kamaaina）という語もあり、カマアイナ・ハオレということもある。

(7) ブラッガーというのは、大げさにいう（brag）人、つまり、ほら吹きのことである。

(8) ハワイの日本人労働者は1909年と1920年に大規模なプランテーションストライキを起こした。自分の待遇を向上させようと目指すようになったのは、アメリカへのひとつの同化の表れであるといわれている。しかし、このストライキをめぐって、日本人コミュニティが、穏健派（静かなアメリカ化を目指す）と急進派（急進的なアメリカ化を目指す）の2派に分裂してしまったことは有名である。

(9) 1919年以来、ハワイ準州議会は日本語学校を取り締まろうと数々の法案を出した。可決されたそれらの法の合法性をめぐって、一部の日本語学校は裁判所に訴えた。これを試訴事件という。試訴事件については、高木前掲論文や、小澤義浄著『ハワイ日本語学校教育史』（日貿出版社、1972年）を参照されたい。

(10) マッキンリーに通う日系二世が多かったので、このハイスクールはハワイ社会では別名、トーキョー・

ハイ（Tokyo High）と呼ばれていた。

(11) バロン後藤(1901～1985)は、ハワイ大学の教授を長年つとめながら、また退職してからも日系社会のために尽力したが、官約移民移民100年祭だった1985年に惜しくもなくなった。

(12) Big Fiveとは、戦前ハワイの経済を独占支配した五大企業のことである。

Castle & Cooke, C. Brewer, American Factors, Theo H. Davies, Alexander and Baldwinの５つをさす。これらの５企業は当時ハワイの経済を支えていた砂糖産業を握っていただけでなく、その関連部門、つまり、運送業、保険業、銀行などを全て支配していたのである。

(13) 日系人のOver-representationとは、全人口に日系人が占める割合よりも全教師数に日系人が占める割合の方が多いことを意味している。

(14) マサジ・マルモト、ベン・タシロは二人とも、法曹界に入り、判事として活躍した。

(15) エドウィン・カワハラ、マサジ・マルモト、ベン・タシロ、ランドルフ・イデウエ、ケンジ・ゴトウの五人が派遣された。

(16) ハワイの日系人は収容所に入れられなかったと思われているが、1875人のハワイ在住日系人が本土の収容所に送られているのである。

(17) The Hawaii Times（1976年８月～10月）掲載記事、後藤健治著「太平洋戦で活躍した日本語兵の物語 (1)～(10)」より。

(18) 後藤健治前掲記事より。

(19) 山本恵里子氏による後藤健治氏へのインタビュー(1987)より。

著者によるハロルド・大西氏へのインタビュー（1986年10月９日）によれば、彼の姉は一番上の兄の教育のために高等教育をあきらめなけらばならなかったという。“もしも兄のことがなかったら、姉もやはり学校に行っていただろう。親はきっとなさけなかったろう”、と述べている。

(20) 前掲のハロルド・大西氏とのインタビューより。

[参考文献]

Kent, Noel. 1983. *Hawaii: Islands Under the Influence.* Monthly Review Press, New York.

Fuchs, Lawrence H. 1961. *Hawaii Pono: A Social History.* Harcourt, Brace & World, Inc. New York.

Kotani, Roland. 1985. *The Japanese in Hawaii: A Century of Struggle.* The Hawaii Hochi, Ltd. Honolulu.

Harrington, Joseph D. 1979. *Yankee Samurai: The Secret Role of Nisei in America's Pacific Victory.* Pettigrew Enterprises, Inc. Detroit.

Saiki, Patsy Sumie. 1982. *Ganbare! An Example of Japanese Spirit.* Kisaku, Inc. Honolulu.

Daws. Gavan. 1968. *Shoal of Time: A History of the Hawaiian Islands.* University of Hawaii Press. Honolulu.

History and Heritage Committee, Kuakini Medical Center. 1981. *History of Kuakini Medical Center: Mr. Kenji Goto.* (An Oral History Project conducted by the Hawaii Multi-cultural Center). Unpublished.

Ogawa, Dennis M. 1978. *Kodomo no tameni: For the Sake of the Children.* The University Press of Hawaii. Honolulu.

前山隆編著. 1986.『ハワイの辛抱人 — 明治福島移民の個人史』（御茶の水書房、東京）

鶴谷寿著. 1977.『アメリカ西部開拓と日本人』（ＮＨＫブックス302、 日本放送協会、東京）

相賀渓芳（安太郎）著. 1953.『五十年間のハワイ回顧』（五十年間のハワイ回顧刊行会、代表者 Yasuo Baron Goto, 大阪高速印刷株式会社）

後藤健治著. 1976.「太平洋戦で活躍した日本語兵の物語(1)～(10)」The Hawaii Times（1976年８月～10月）掲載

王堂フランクリン、篠遠和子著. 1985.『図説ハワイ日本人史：1885～1924』（日本人官約移民ハワイ到着100年記念出版物）ハワイ移民資料保存館、バニース・パウアヒ・ビショップ博物館出版局、ホノルル、ハワイ）

小澤義浄編著. 1972.『ハワイ日本語学校教育史』（日貿出版社）

高木真理子著.1989.「戦前ハワイの日本語学校 — アメリカナイゼーションと修身教育」（アメリカ史研究 No.12）

山本恵里子氏による後藤健治氏へのインタビュー.1987.

高木真理子によるハロルド大西氏へのインタビュー.1986. 10／9.